

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



第4回写真コンテスト 最優秀「二代城主菩提寺～金勝寺～」 山形市・佐藤維有氏撮影

- ◆ 山形藩主・最上家親の最期を正す — ある一学僧の日記を検証して —
- ◆ 宮本武蔵の養子 伊織は最上家浪人か
- ◆ 歴史随想「私と歴史の旅」
- ◆ 俳句「探梅行」

No.11

2004年3月発行

最上義光歴史館

山形藩主・最上家親の最期を正す

—ある一学僧の日記を検証して—



小野末三

慶長一九年（1614）正月、義光を病で失った後の駿河守家親の襲封は、必ずしも平穏な藩内情勢のもとで行われたものでは無かった。しかし、義光以来の徳川家との親密さに加え、家親自身も若年より家康に近侍しており、その友好な結び付きから家親の襲封には何らの支障もきたす事もなく、その年に起きた藩内抗争についても、幕府は疑惑の目を向けることは無かったのである。

その年の夏は越後高田城普請手伝いを勤め、続いて大坂の陣では江戸城留守居役に任せられる程に、幕府の信任を得ていた。この家親の元和三年（1617）三月に至るまでの、三年有余の藩主時代を評価するには、それを語る程のものも無く、家親と言えはその

不可解な死因のみに凝縮され、喧伝されてきた感がある。

曰く「鷹狩りの帰路、楯岡甲斐守邸で饗応の後、帰城すると苦しみ出し絶命した（諸家深秘録）」、また「能楽を樂しみ食後に腹痛をおこして死んだ（藩翰譜）」、さらには侍妾に寢室で刺殺されたとか、甚だしきは山野辺義忠が持参した饅頭を食べて悶絶、死骸は早々に灰にされたなどと、家親の人格を全く無視するような、惨めな評価を受けてきたのである。

このような家親につきまとう数々の変事が、どのような経緯で形づくられてきたのか、ここで説明するのは困難である。しかし、ここに来てその従来の悪評を根底から否定し、家親の面目を晴らすことになった、家親と親交のあった一学僧の『日記』に巡り会えたのである。

竜派禅珠（寒松と号す）は天文一八年（1549）に生れ、寛永一三年（1636）八八歳で没した臨済宗に属した学僧である。埼玉県川口市（当時の芝郷）の長徳寺の住持で、慶長七年（1

602）に徳川家康の命により、足利学校の庠主となり、両所の教育と寺務とを勤めた人物である。諸学問に精通し、將軍家や、幕府要人をはじめ諸大名とも交流を持ち、特に卜筮（占い）に通じていたから、一年間の展望を占う年筮を献ずるを常としていた。現在、寒松日記は欠年の箇所もあるが、和様漢文で簡潔に書かれており、所々に見える家親に関わる記事の中から、元和三年（1617）の江戸での家親と子の源五郎の動きから、特に死亡日とされる三月六日前後の記事を拾い、疑惑に満ちた死因を払拭し、家親の名誉を回復していきたい。

（イ）正月六日 「未だ暁けず、芝阜を出て江戸に入る」

寒松は將軍たちへの年筮献上のため、新年早々芝村を出て江戸に入った。

（ロ）同月十日「晴れ登城する、炉辺に至り年筮を献ず、城



最上家親の五輪供養塔（高野山）

より帰る時、駿州（家親）の第（邸）に往く、昨夜、使者口上に齟齬（そご）くいちがいがいせし故、空しく帰る」

寒松は登城して將軍秀忠に年筮を献じ、続いて家親を訪れる。しかし、何らかの手違いで会えずに帰った。この日、寒松は老中の青山忠俊・本多正純・土井利勝などにも会っていた。

（ハ）同月一三日 「駿州にて晨炊す」

この日、寒松は早々と家親を訪ね朝食を共にした。恒例の年筮を献じてのことであつたらう。家親が新年を江戸で迎えていたことが判る。そして、旧知との親交を重ねながら、一週間後に芝村に帰って行った。

(二)二月廿七日 「継いで道閑の所よりも贈り来る」

道閑は寿庵とも称し、学問・医術に精通した人物で、度々登場している。義光死去の際の家親下向にも従うなど、家親親子に近侍していたことを示す書状もあり、この道閑の動向が家親の所在確認に、貴重な指針となっている。二日前、寒松はこの年の二度目の江戸入りを果たす。日記は例により各層の人物との接触を伝える。この道閑の贈物は最上家からの物ではなかったか。

(ホ)三月二日 「道閑、餅酒を贈り来る」

家親の死を数日後に控え、道閑より再び贈物があった。この日に近臣の道閑が江戸に居たということは、それは家親の在府を示す、貴重な記録の一つであろう。この日、寒松は安藤重信・本多正純・土井利勝などの要人達と会っている。しかし、寒松が芝村に帰る一二日までの間、家親の進退については一言も触れてはいない。ここに家親が病床に伏したことを裏付ける、將軍からの見舞状がある。

同三巳(元和三年)

病氣之節

賜御書

所勞之由無心許、能々養生肝要候、猶酒井



最上家親の墓標(山形市・光禪寺)

備後守可申候也、

三月 秀忠(黒印)

最上駿河守とのへ

この見舞状を見ても、將軍お膝元の江戸の真真中で、藩主殺害などという途方もない出来事が行われたとは、とうてい考えられないのである。將軍から見舞状を受ける程に、秀忠からの信任は厚かったのである。

(ハ)同月一二日 「最上の疾病を

筮ひ、翌(日)侶庵を遣す」

寒松はこの在府中に家親に会わず帰途についた。途中、悪天候に悩まされながら蔵宿に着く。寒松は家親が既に病に倒れていたことを知っていたのである。それを氣遣つてか占いをたて、親友で医師の侶庵を家親のもとに遣わした。おそらく、占いには悲観的な結果が出たからであろうか。家親の死去日、(六日)が事実ならば、寒松が出立するこの日まで、未だ公にされず伏せられていたのか、それとも寒松

には知らせがなかったのか。その後、江戸に入った侶庵から、最上家の内情についての報告は受けていたであろうが、

三月中の日記は何も語ってはいない。秋田藩士梅津政景の三月一八日の日記には、四日の晩に俄かに思い、六日の四ツ時に亡くなったと記している。

(ト)四月廿日 「甲寅 小月中駿

州の計」

家親の死から四十数日の後、足利学校の寒松のもとに、その死が知らされたが、日記は簡潔に伝えるのみである。しかし、この時期にはじめて家親の死を知った訳ではなからう。この日、はじめて最上家よりの正式な知らせがあったのではなからうか。

(チ)五月一六日 「雨 最上源五

郎より飛脚来る、寿庵(道閑)・侶庵の文相添える」

五月三日に家督を継いだ源五郎義俊より、寿庵・侶庵の文を添えての飛脚が来た。義俊襲封の挨拶を兼ね、父同様の交誼を願つてのことであつたらう。二人の文には家親死後の最上家の現状が述べられていたであろう。以後、寒松との関係は義俊の代まで持続したのである。

最後に思うには、家親は春の一日を能楽で楽しんでいたが、春の陽気に食中りで倒れたのではなからうか。江戸の真真中で何か異変でも起こせば、隠し通すことは困難である。まして將軍

の見舞状も有るように、家親変死説は受入れられず、単に急死として取扱うべきで問題である。従来の不可解な説の一つでも事実であれば、その時点に於いて大名の地位を失っていたであろう。寒松日記は、従来の説を根底から覆す好材料として、姿を現してくれたのである。

なお「歴史館だより・8号」に、片桐繁雄氏も家親の人物像について述べておられ、従来の死因についても疑問を呈されている。

小野末三 (おのすえぞう)

一九二八年 旧台湾台南州に生まれる

終戦後北村山郡榑岡町に移る

以後独学にて高校教員免許を取得

社会科教員など複数の職を経て現在

は最上家関連の調査研究の日々

を過ごす

【論文】

「大山筑前守光因の再考―最上義光の六男大山光隆との混同説を正す」

『山形県地域史研究』二二号、一九九七年

「榑岡甲斐守と熊本藩士榑岡氏について」

『山形県地域史研究』二五号、二〇〇〇年

「関東に於ける最上義光の動向について」

『山形県地域史研究』二六号・二七号、二〇〇一・二〇〇二年

「山形藩主時代の最上家親について」

『山形県地域史研究』二八号・二九号、二〇〇三・二〇〇四年

【著書】

「羽州最上家旧臣達の系譜―再仕官への道―」

(最上義光歴史館、一九九八年)

宮本武蔵の養子 伊織は最上家浪人の子か

山形市立図書館長
県文化財保護協会専門員

布施幸一

劍聖宮本武蔵の養子の一人に有名な伊織がいる。彼は十五歳の時に、播磨国明石城主小笠原忠真に近習として仕え、弱冠二十歳で家老になったという。その後、豊前小倉十五万石小笠原家において禄高四千石という破格の出世を遂げている。もちろん、養父武蔵の後押しもあつたろうが、それにして、彼はよほど才能に恵まれていた人物と言える。

さてこの伊織だが、吉川英治の原作『宮本武蔵』では三之助という名で登場する。そして、「最上家の浪人」として祖父三沢伊織が出てくる。また、三之助は武蔵の恋人お通の弟という、いかにも面白い筋書きである。

この小説の材料になったのは、主として武蔵の伝記で有名な『二天記』である。その中では、巖流佐々木小次郎に関する記載に次ぐほどの紙幅を費やし、武蔵と伊織(本書では無名の童)の出会いが語られる。

物語は武蔵が出羽の正法寺原というところで、泥鰯取りの童に出会うと

ころから始まる。紙面の都合で話の内容を紹介できないが、この話の終わりに興味深い付記があるので、その原文を上げておこう。

伊織父は正法寺村の者と雖も、本羽州最上家の浪士にて、此処に住みて自然に農夫となれりとも云へり、伊織武蔵養子と成、宮本を号す(下略)

この一節が、伊織の出自を「最上家浪人の子」とする根拠になつていた。だが、現在はこの記述そのものが疑問視またはデタラメとされているのだ。

そもそも『二天記』なる書はというと、肥後藩筆頭家老松井家の家臣豊田正剛の書留が原典。それに子の正脩が『五輪書』等の記実を加え、宝暦五年(1755)に『武公伝』としてまとめられたものを、さらに正脩の子景英が安永七年(1778)に改めて一書にしたもの。武蔵没年(正保二年・1645)から百年余りが経っていたため、彼に関する伝承は紛然として、真偽のわからない風聞が飛び交い、過大評価やこ

じつけも多かった、と編者の景英もみずから奥書に記している。

ところが、昭和四十年代になつて、伊織の出自を明らかにする史料が出てきた。それは彼が、郷里の氏神である泊神社(兵庫県加古川市)に奉納したとされる棟札である。某かに書かせたものであるが、記録によれば、伊織は村上源氏の流れを汲む赤松氏の末孫田原氏の出であるという。

その棟札は、武蔵没後比較的早い時期の承応二年(1652)に成立した史料であり、且つ氏神の社殿造営に伴うものとして、やはり信頼のおけるものであるとする説が有力である。一方、棟札の冒頭に見る村上源氏云々の書き方は、個人顕彰の意味合いが強く、必ずしも事実を記したものとはいえない、と疑問視する向きもある。

いずれに



宮本伊織奉納棟札 (武蔵武人画家と剽奪の世界展「じ」転載)

しても、伊織の子孫に伝わる『宮本家系図』等の史料に基づけば、彼は慶長十七年(1612)播磨国印南郡米墮村(兵庫県高砂市米田町米田)の田原久光の次男として出生。武蔵は久光の実弟と言うから、伊織は歴とした武蔵の甥ということではほぼ定説化している。また、このことによつて武蔵の生誕地は美作ではなく、播磨とする説が有力になつてきている。ただ、棟札には、伊織が元和年間に小笠原家に仕えたことあり、生年が正しければ、彼は十一・二歳の時となる。この点は冒頭の十五歳と齟齬をきたす。

それにしても、『二天記』の童(伊織)は、なぜ「最上家浪人の子なのであるうか。また、これが全くの虚構ということになるのであろうか。筆者は『二天記』を何度か読み返し、且つ多くの関係書を渉獵したが、なお釈然としなない。さらに些か私見もあるが、残念ながら紙数が尽きた。

※『二天記』肥後文獻叢書第一巻』
歴史図書社 昭和46年)

私と歴史の旅

高梨紀子

私が「歴史」という言葉を意識したのは、高校の「世界史」「日本史」の授業からだ。高梨紀子「世界史」「日本史」の授業からだったような気がします。歴史の授業は「大化の改新」「関ヶ原の戦い」「明治維新」等の大きな括りの学習が主体だったことから、生まれ育った故郷の歴史への認識は全く持つことはなかったのです。幼い頃、祖父母から聞いた地域のいろいろな昔話も、広い意味での歴史とは思いませんでした。しかし、歴史の授業は嫌いではありませんでした。

数年前のことですが、「女性だけで歴史史を勉強する会」発足の新聞記事を目にし、女性だけというところに魅せられてサークルに入れてもらいました。講師の先生方の郷土史を中心としたお話しをお聞きし、思わぬことは、歴史の舞台となった土地を訪ねてみようということでした。「百聞は一見にしかず」と言いますが、現地立つことでより自分のものになるような気がして、手始めに県内の身近な所を見て歩きました。グループの方々と交流も楽しく、歴史を学ぶことを通じて自分の世界が広がりました。私のこだわりから友人数人を山辺の畑谷に案内し、小高い山の上の畑谷城

跡に登ってみました。かつてこの場所で最上と上杉の壮絶な戦いがあり、多くの人が亡くなった話しには皆驚いたようでした。

私は以前から観光旅行に出掛ければその土地の史跡、伝承、文化等に行きたくて、今は歴史を調べそれを確かめるために旅をするようになりました。方々に出掛ける事でこれまで引掛かっていた疑問が解け、思わぬ「そうだったのか」と手を打ったり、「目から鱗」とまではいきませんが点と点だった事柄がつながることもありました。サークルの講座で最上義光の息女「駒姫」の話がでた時、この悲劇の元となった豊臣秀吉、秀次の奥州征伐について興味をそそられ、岩手の二戸市にある九戸政実の城跡に出掛けました。城跡にはた本丸跡、二の丸跡などと案内標識が立っているだけで、当時も発掘調査が行われておりました。晴れたわたった青空の下、城跡に立った時、歴史に「もし、何々だったら」はナンセンスだと言いますが、この戦いが無かったらと思つくと、駒姫の悲運に心が痛みました。

一乗谷等を訪ねてみました。いずれも豪華の跡、落城の悲劇を秘めて心に残る史跡ばかりでした。その中でも強く印象に残ったのは七尾城でした。小雨の中でしたが私達の他は訪ねる人の姿も見えず、この城を攻め落とされた上杉謙信が詠じたと伝えられている「九月十三夜」の漢詩『霜満軍営秋氣清 數行過雁月三更』の案内板の前に立った時、攻める側、攻められる側双方の兵達のどよめきが遠くから聞こえたような気がしたので、古城跡にはそこに生きた人々の思いが残っていると考えるひとときでした。七尾城は是非もう一度訪れたいところです。



七尾城跡

俳句
探梅行
「山形文学」同人
笹沢 信
探梅の文あり義光忌を思ふ
邯鄲の夢なり霞城の花筏
かなかなの降る寂光や駒姫忌
白地着て蝶の来てをり駒姫忌
初鳴を浮かべ霞城の濠かげる



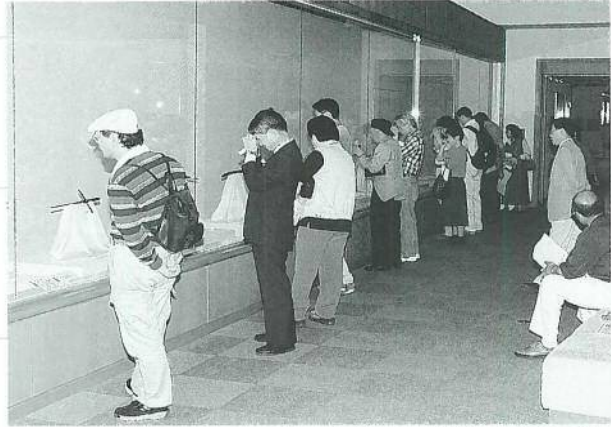
※義光忌は一月十八日(現行曆二月二十六日) ※駒姫忌は現行曆九月二日

史跡を訪ねこのような感慨にふけるのも、史実の探求の傍らロマンに浸ること、歴史を学ぶ楽しみを見出している私だからかもしれません。過去を知ることが現在を知ること、継がり、そして何よりも魅力的なのは、歴史を学ぶこと、素敵な仲間と巡り会えることです。これからも歴史のロマンにふれる旅を続けたいと思います。

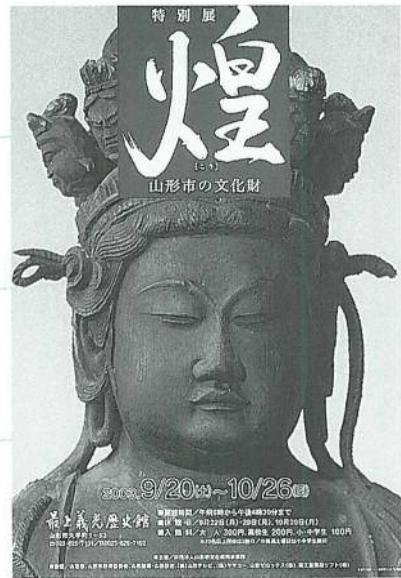
(山形市、主婦)



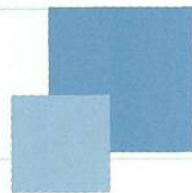
平成15年度
事業スナップ



企画展「よみがえる赤羽刀」～赤羽刀と収蔵刀剣～



特別展「煌」～山形市の文化財～





歴史講座(史跡めぐり)
「最上家ゆかりの『寺』を訪ねて」



日本刀講座 布施幸一先生



古文書講座 武田喜八郎先生

平成15年度事業

◆企画展 《4月8日～6月8日》

「よみがえる赤羽刀」～赤羽刀と収蔵刀剣～
展示総数14口(うち赤羽刀8口)
ギャラリートーク 5月3日・4日 講師／布施幸一先生

◆こども講座 《7月30日》

「山形城と最上義光」
～今に残る最上氏時代の三の丸を歩いてみよう～
霞城セントラル↓十日町(歌懸稲荷)↓横町口↓七日町口
↓かすがい口↓小橋口↓三の丸堀跡↓七小周辺↓小田口
(財部稲荷)↓霞城公園西堀↓稲荷口(双葉公園)↓吹張口
↓第二公園

◆特別展 《9月20日～10月26日》

「煌」～山形市の文化財～
展示総数31点(重文2点、重美2点、県文9点、市文9点)

◆歴史講座(史跡めぐり) 《10月22日》

「最上家ゆかりの『寺』を訪ねて」
光禅寺↓常念寺↓光明寺↓金勝寺↓禅会寺↓東林寺↓
中野城跡↓雲祥院 講師／片桐繁雄先生

◆歴史講座 《1月11日・17日・24日》

「最上義光と文学作品」 講師／片桐繁雄先生

◆第4回写真コンテスト 《1月31日～2月22日》

「最上時代の面影を探る」入賞作品展
入賞作品 一般の部19件／小中学生の部1件

◆日本刀講座 《2月28日、3月6日・13日》

「初心者のための日本刀講座」
2月28日「日本刀の歴史」 講師／布施幸一先生
3月6日「郷土の刀工」 講師／布施幸一先生
13日「取扱いと鑑賞の手引き」

◆古文書講座 《2月29日、3月7日・14日》

「『出羽太平記』を読む」 講師／武田喜八郎先生

研究余滴④
知識人たちの戦い
長谷勘三郎

慶長五年(1600)秋の出羽合戦と言えば、「長谷堂合戦」として知られているが、このとき戦った最上・上杉両軍のなかには、すぐれた知識人たちが加わっていた。

最上義光は桃山文化華やかなりし京都において、古典に通曉した連歌作者として遇されていた。

畑谷城を死守して、三百余りの城兵もろともに討ち死にした江口五兵衛光清、上杉鉄砲隊の乱射を浴びて、主君義光の馬前で壮烈な最期を遂げた堀喜伴。この二人は義光に扈従して京都文化界のサロンにしばしば出入りし、公家や連歌師らとともに多くの連歌を巻いた。

一方、上杉軍二万を率いて侵攻した直江兼続もまた、妙心寺の南化和尚の賛辞にくまなく語られるごとく、世に知られた好学の士であった。文雅風流の席に臨んでも、和漢・漢和の連歌数巻に名を残している。

兼続に従って出征し、赤柄の槍をふるって奮闘したと伝えられる老武者、

前田慶次郎も豊かな教養と繊細な感覚を持った文化人であった。『前田慶次道中日記』一巻は、その人柄を如実に物語るものだ。

ところで、在京時の義光参加連歌の連衆と兼続のそれとは、数名の共通メンバーが見られる。

里村紹巴、昌叱、友益。これら専門連歌師のみならず、五奉行の一人前田玄以、細川幽齋など、著名な文人政治家も共通参加者である。

義光と兼続が一座したことはないにしても、これらの人々を通して互いに文名を知り、尊敬しあっていた可能性も十分にある。

そういえば、いろんな文献史料をみて、敵対した両者が相手をけなした言辞を見出すことはできない。

長谷堂合戦の後、義光は、兼続の戦いぶりを絶賛した。

「直江すこしも臆せず心静かに陣払いし、勝ちに乗りたる味方を数多討ち取り……誠に景虎武勇の強み、今に残りたり」(最上記)

賞められた兼続、称賛を惜しまなかつた義光、いずれも傑出した知識人だったのだ。

第4回 写真コンテスト

「最上時代の面影を探る」

最優秀 一般の部

二代城主菩提寺

〜金勝寺(三枚組) 佐藤維宥氏



※一枚は表紙に掲載

刊行物のご案内

北天の巨星 最上義光 片桐繁雄著 一〇〇〇円(税込)



現在の山形市の基礎を築いた名君、最上義光の生涯と業績を史実に基づき読み易い文章で紹介
●お問い合わせは歴史館まで

ご協力をお願い
最上家にかかわる資料等をお持ちの方、ご存じの方、ご一報ください。

※最上時代の歴史や文化を明らかにするための資料を探しております。今後の研究のために役立てたいと思います。よろしくご協力ください。

ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 一般 大人300円 高校生200円
小・中学生100円(土曜日は無料)
団体(20名以上)大人240円
高校生160円 小・中学生80円
休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日) 12月29日から1月3日
交通 J R山形駅より徒歩約10分 大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成16年3月発行

編集・発行 財団法人山形市文化振興事業団 最上義光歴史館

〒990-0046 山形市大手町1-153

☎023-62517101

☎023-62517102

印刷 田宮印刷株式会社